

土に還る(3) 灰の行方

エッセイ 大江戸エゴ帖
第八回

文 / 石川英輔

図版 / かまど炊事をする女性。薪を燃やしてきた灰をかまどの前の俵の中に溜めておき、杯になるとほかの容器に移して灰買いが来るのを待った。「神事行灯より」



もつとも身近で重要なエネルギーの利用法は光源と熱源だが、電灯やガスコンロを使うようになる前は、光源には油、熱源には薪や木炭を燃やすのが普通だった。今ふうというなら、どちらもバイオマス燃料である。油も薪炭も燃やせば二酸化炭素になるところは同じだが、油脂を燃やせばススが少し出るだけでほとんどなくなってしまうのに対して、薪炭を燃やすとかなりの量の「灰」が残る。

同じく灰といっても、現代の一般廃棄物などを燃やした灰には有害な物質が含まれている恐れがあるため、慎重に処分しなくてはならないが、植物バイオマスつまり薪やわらなどを燃やした灰は、「木灰」あるいは「草木灰」といって広い用途があり、江戸時代から昭和初年までの日本では商品として取り引きされていた。

灰に経済的な価値があったと聞けば、意外に思う人もいるかもしれないが、合成した化学物質を使うようになる前の灰には、肥料、洗剤、酸性中和剤としての大きな需要があり、都市では、家々を回って灰を買い集める「灰買い」という職業が成り立っていた。

たとえ裏長屋でも、人が住んでいればかまどがあつて、炊事をすれば灰が出る。灰には

炭酸カリウムが含まれていて、水に溶けるとかなり強いアルカリ性になるため、大量の灰を捨てればやっかいな廃棄物になるところだが、買い手があれば捨てる人はいない。

普通の民家だけではなく、大量の灰が出る銭湯、大店はもちろん大名屋敷でさえ、「灰小屋」という物置に保管しておいて灰買いに売った。灰買いは、買い集めた灰を「灰問屋」に売り、灰を使う人が必要量を灰問屋から仕入れるという形で、都市から出た灰が地域全体に広く流通したのである。需要が多いため、灰問屋には大店が多かったようだ。

灰を使う最大の産業は、カリ肥料として大量に使う農業だった。使用量が多いため、農家の人は灰問屋を利用せず、自分で町へ買いに行くことも多かった。紺屋も、藍染めの染色液をアルカリ性に保つためにかなりの量を使った。また、灰を水に溶いた「灰汁」を洗剤として使う産業は、紙漉き、絹の精練など広い範囲にわたっていた。

バイオマス燃料の消費地だった都市が灰の大産地を兼ね、灰が土に戻る大きな循環の輪の一部として機能していたのである。

いしかわえいすけ
作家。著書に、江戸時代の資源やエネルギーの循環について紹介した「大江戸リサイクル事情」大江戸えねるぎ事情などがある。

どこでも公園気分！ 芝生のベンチ



育てて楽しむ、天然芝のベンチ「Paddy」。屋上緑化用の人工マットを使用して作られていて、メンテナンスは水やり、日光、年数回の芝刈りでOK。都会のビル群の中でも、このベンチに座ればまるで公園の芝生のようなふかふか感が味わえます。昆虫を思わせるような有機的で美しいフォルムもポイントです。



マインドスケープ(電話03-5773-9035) <http://www.mindscape.jp>

読んだあとは"使って"楽しもう



©MoMA Design Store

古新聞と古雑誌がおしゃれなプレスマットに生まれ変わりました。「リサイクルニュースペーパー&マガジン プレスマット」は、世界に一つの手作りデザイン。筒状の細い木にリサイクルプリントをていねいに巻きつけ、糸で結び合わせて生まれたストラップ柄は、シックな印象を与えてくれます。

MoMA Design Store (電話03-5468-5801) <http://www.momastore.jp>

マイバッグの次は、マイ「傘ケース」!



雨の日に見かけるビニールの傘袋。使い捨てでもったいない、と思っていたあなたに朗報! キュートなアンブレラケース「paquet」(パケット)は、使わない時はミニトート型になり、バッグのチャームとして携帯できます。また、傘以外にも花やパンを包むなど使い勝手もアイデア次第。雨の日もスタイリッシュに、エコに過ごせます。

コラゾン(電話06-6311-0161) <http://www.corazon.jp>

エゴモノ

エコモノたちで、あなたの暮らしを彩りあるものにしてみませんか。